
占領下の明暗——中野重治の戦後小説「おどる男」「軍楽」を中心に
Light and Darkness under Occupation; Analyzing “Odoru Otoko” and “Gungaku”
written by NAKANO Shigeharu after world warII

●
竹内 栄美子
教育センター 人文教室

●
Emiko TAKEUCHI
Educational Center, Humanities

●
2013年9月20日受付

●
Received : 20 September 2013

After World War II, Japan was occupied by the Allied Occupation Forces for about 6 years and 8 months. In those days, it was impossible for Japanese to express a criticism about GHQ. There was the strict censorship of printed matter. However “Odoru Otoko” written by NAKANO Shigeharu in 1948 was the novel embedded the criticism against GHQ. In this paper I analyzed the contents of this novel in order to clarify the meaning of the works by NAKANO Shigeharu in the post-war period. He fought for the pacifism. In addition he played an important role in the democratic cultural movements under the guidance of Japan Communist Party that criticized against the aggressive war and militarism in the World War II.

キーワード：中野重治, 占領, 戦後, 「おどる男」, 「軍楽」

占領下の明暗 —— 中野重治の戦後小説

「おどる男」「軍楽」を中心に

竹内 榮美子

はじめに

高等学校国語教科書（教育出版）に教材として掲載されている「おどる男」は、中野重治の代表的な戦後小説のひとつである。初出は、「新日本文学」一九四九年一月号であり、単行本『話四つ、ついたら一つ』（一九四九年二月、新日本文学会）に収録された。同書には「軍楽」「おどる男」「太鼓」「五勺の酒」「街あるき」といった五編の小説が収録されているが、戦時下に書かれた「街あるき」（一九四〇年六月、七月号「新潮」を「ついたら一つ」として除けば、「中野重治戦後短篇集」というサブタイトルのとおり、「話四つ」は戦後の中野の短篇小説である（ほかに、中野の著名な戦後短篇小説としては「五勺の酒」や「萩のもんかきや」などもある）。敗戦後、一九五二年四月の対日講和条約発効までの間、日本は占領され連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指導を受けた。「おどる男」は、その占領下の日本の状況を描いたものである。

アジア太平洋戦争に敗北した一九四五年から七〇年近くが経過した現在、敗戦直後の状況は、すでに遠い時代のできごとであろう。戦後の混乱期ほどのような状況であったのか、当時の日本人はどのような精神状態であったのかなどについては、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店、二〇〇一年、増補版は二〇〇四年）をはじめとするすぐれた論考があるが、当時の日本の状況は、戦時下の制約が解けた解放感によって多くの雑誌が創刊され言論活動が活発になりはしたものの、その一方では、戦禍による焼け跡の荒廃した状況にあった。それは、破壊された建物や不足する物資のことだけではなく、日本人の精神そのものが荒廃しているというありさまであった。「おどる男」は、その荒廃の様子を描いている。

本稿では「おどる男」を取り上げて、この小説が敗戦直後の日本の精神状況を

描きつつ、占領下であるにもかかわらず占領軍（当時は進駐軍）批判を暗示していることを明らかにする。さらに、「おどる男」と同じ時期に執筆されたもうひとつの小説「軍楽」においては、占領軍（米軍）への批判ではなく、むしろ米軍の民主的なありように羨望の思いを抱いている語り手の心情に注目し、「おどる男」とは対極の占領軍（米軍）認識が提示されていることを示したい。すなわち、占領下において中野重治は、占領軍（米軍）に対して批判一辺倒でもなく、称賛ひとすじでもなく、それぞれのプラスマイナスを見出していたということだ。

戦後史のうえで占領という事態をどのようにとらえ評価するか、現在でもさまざまな議論がある。とりわけ近年には「戦後からの脱却」ということが喧伝され、占領下のみならず、平和思想、民主主義、人権意識を発展させてきた戦後史の枠組みそのものを否定しようとする動きも強まってきている。中野が示した正負あわせの見方は、そのような現在の文脈から捉え返してみる価値のある見解である。このことについては、拙著『戦後日本、中野重治という良心』（平凡社新書、二〇〇九年）でも重要なこととして触れたが、ここでは紙幅の関係上、小説の詳しい作品分析ができなかった。そこで、本稿では「おどる男」の詳細な読解を通じて、占領下の明暗を中野重治がどのように描いていたかを確認し、さらに「軍楽」も取り上げて、中野が示していた占領への認識を明らかにしつつ現在の文脈へとつないでみたい。

一 占領下の中野重治

「おどる男」の作品分析に入る前に、まず当時の中野重治が置かれていた状況と時代背景を確認しておこう。一九四五年八月の敗戦のあと、同年十一月に日本共産党に再入党した中野は、年末の新日本文学会創立大会で中央委員に選ばれた。また、翌年一九四六年には日本民主主義文化連盟（略称文連）創立のために働き、雑誌「民衆の旗」編集にもたずさわる。新日本文学会や文連での活躍とともに、一九四七年四月には、第一回参議院議員選挙に日本共産党から立候補し、当選。三年任期の議員として一九五〇年五月まで働くことになるが、議員時代に妹の鈴子に宛てた書簡には、つぎのような記述があり、目を引く。

私達は元氣。私は十一日頃から大阪、京都、東海道をまわる。二十三日から再び国会。国会というところは化物屋敷のようなところで、実際行つてみると、あのため今まで国民がどこまで馬鹿にされ、ふみつけにされて来たかというところが骨身にしみて分かる。いくらか民主化された現在でさえそうだから、今まではどれ程だったか、考えると身の毛がよだつ。(中野鈴子宛 一九四八年一月十七日書簡、竹内栄美子・松下裕編『中野重治書簡集』平凡社、二〇一二年)

「今まで国民がどこまで馬鹿にされ、ふみつけにされて来たかということが骨身にしみて分かる」と述べていて、中野自身、どこでも国民の側に立っていることがうかがえるが、国会が「化物屋敷」のようだと論評しているのが面白い。中野の国会議員としての仕事は『国会演説集』(八雲書店、一九四九年)に収録された演説によつておおよそのことを知ることができる。参議院では、運輸及び交通委員、労働委員、文部委員、在外同胞引揚問題に関する特別委員会委員などとして働いたが、議員としてだけではなく、この時期、中野は新日本文学会の活動でも日本各地に出張して多くの文学講演をこなしていた。戦後しばらくの間、中野重治がかなり多忙な生活を送っていたことは、右の『中野重治書簡集』に収録されたいくつかの手紙を見ても容易に推察できる。

このように多忙をきわめていた中野の「おどる男」と「軍楽」は、ともに一九四八年十一月に執筆された小説である。原稿末に記された執筆日は、「おどる男」が一九四八年十一月七日、「軍楽」が同年十一月十六日で、わずか十日の差で書かれた。発表は、同じく一九四九年一月号(「おどる男」は「新日本文学」)「軍楽」は「展望」にそれぞれ発表)であったが、執筆されたこの一九四八年という年は重要な年であった。というのも、この年には、ふたつの大きなできごとが生じていたからである。ひとつは神戸・大阪の朝鮮人学校閉鎖問題、もうひとつは福井地震である。中野重治に関することだけでなく、一九四八年は、日本あるいは東アジアの戦後史においても重要な年だと考えられる。

「おどる男」「軍楽」執筆の四ヶ月ほどもまえ、一九四八年六月二十八日、中野の郷里である福井県で大地震があり、中野は七月五日に日本共産党国会議員団を代表して調査と救援のために福井県へ出かけた。しかし、福井入りしたのち、七

月十日には春江町で警官隊に拘引され、福井市のアメリカ軍軍政部に連行されることになる。そして、翌日、アメリカ占領軍福井軍政部軍政官ジェームズ・F・ハイランド中佐の命令によつて、北陸震災救援民主団体協議会の人たちとともに東京に押送されたのである。

中野をはじめとする北陸救援民主団体協議会の人々が東京に押送されたことは、占領軍の方針に従ったものであった。このことは、同じ一九四八年の四月に生じた、四二四阪神教育闘争と呼ばれる神戸・大阪での朝鮮人学校閉鎖問題を想起させる。このとき、GHQは非常事態宣言を出した。福井地震のさいの東京への押送も、朝鮮人学校閉鎖問題のさいの非常事態宣言とともに、占領軍は、共産主義者が事態を混乱させ「煽情行為」を行うと考えたのであろう。朝鮮人学校閉鎖問題の経緯や、このとき、中野がどのような見解を示していたかは、前掲『戦後日本、中野重治という良心』で、日本民主主義文化連盟の活動とともに取り上げて詳述したのでそれを参照されたい。福井地震に関していえば、福井市長の名で「災害時公安維持に関する条例」が出され、民主団体の自主的な救援活動は阻止され、追放・押送となったのである。救援活動が「公安維持」を乱し「煽情行為」とみなされたことは、占領軍が共産主義者をどのように認識していたかがうかがえる。

もともと占領軍は、敗戦直後、共産党に対して寛大な対応をとっていた。戦時下の軍国主義ファシズムに対抗した民主的な勢力として位置づけていたのだが、しかしそれは軍国主義ファシズムや軍閥を解体して日本の戦中の勢力を払拭するために、共産主義者を利用したという面もあったのである。共産党のほうも、戦時下、獄中に囚われていた自分たちを解放してくれたのが占領軍だったから、占領軍を「解放軍」と位置づけて感謝の念を表明していた。だが、占領軍のほうは、自分たちが解放し厚遇した共産党勢力が勢いをもってくると、それを抑制し阻止しなければならなくなる。

同じころの東アジアの情勢は、前年の一九四七年には台湾で二二八事件が起こり、この一九四八年四月には朝鮮半島の済州島で四三事件が起こっていた。国民党政府の腐敗や略奪に苦しむ民衆蜂起を弾圧し、多数の人々を虐殺した二二八事件については、近年、従来の「台北二二八記念館」に加え、新しい「二二八国

家記念館」(二〇一二年二月二八日に開館)も開設されているが、この事件では、背後に共産党勢力があることが疑われていたという。他方、四三事件のほうは、南朝鮮単独選挙に反対した武装闘争を発端としたもので、在朝鮮アメリカ陸軍司令部軍政庁の指示をうけた李承晩政権の弾圧によって数万人の人々が虐殺された事件である。これら東アジアにおける民衆蜂起を危険視し、共産主義勢力の台頭と考えた占領軍の方針が日本でも先鋭に展開し始めたのが、この一九四八年という年だったのだと考えられる。翌年の一九四九年には、中華人民共和国が成立する。一九五〇年には朝鮮戦争が勃発する。すなわち、第二次大戦末期、一九四五年二月のヤルタ会談の段階ですでに方向づけられていた、米ソによる冷戦体制が東アジアにおいて次第に強化されていく事態が敗戦後の一九四八年に顕著に見られるということである。

国内では、前年の一九四七年の二・二ゼネストは中止させられていたし、明らかにこの段階で、それまで「解放軍」と思われていた米軍は、占領政策を方向転換させていた。「逆コース」と言われる方針は、一九四九年の中華人民共和国の成立、一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発前後に生じたレッドパージなどよりもっと早く、一九四八年の段階で、すでにその方針をあらわにしていたことだろう。翌年の一九四九年四月には、団体等規制令が公布され、左翼団体にも適用されて構成員の届け出が義務づけられていた。さらに、七月および八月には、下山事件、三鷹事件、松川事件といった奇怪な事件が続げざまに起こり、それらは共産主義者のしわざだというフレームアップによって喧伝された。これらの事件については、のちに松本清張が『日本の黒い霧』(文藝春秋新社、一九六一年)で、事件の背後にあった占領軍の「謀略」を丹念に解き明かしている。

つまり、これら前後のできごとを見ると、一九四八年四月の朝鮮人学校閉鎖問題と、七月の福井地震救援民主団体弾圧事件は、占領軍の方向転換を如実に語るものだったと言えるのである。「おどる男」と「軍楽」は、このような情勢のなかで書かれた。では、それらはどのような小説だったのか。

二 「おどる男」

「おどる男」は、次のように始まっている。

せいしている時にかぎつてなかなか電車が来ない。だれもかれも不服そうな不機嫌な顔をしている。それも、これが不服だといって外へあらわせるような爆発させられるようなものではない。それだけに、屈辱感のようなものがつきまとう。みなわるい顔いろをしている。さえぬ色だ。(中野重治全集) 第三巻、四二頁)

「だれもかれも不服そうな不機嫌な顔をしている」とあるのは、電車がなかなか来ないことだけに対して不服で不機嫌なのではない。むしろ電車が来ないこともひとつの原因には違いないが、それよりもっと根が深い理由がある。この「不服そうな不機嫌な顔」という言い方は、このあと、同様の表現として「つまらぬ」という顔つき「今ごろの日本人といった顔」「心が快活に、外へ外へと、本質的なものへ本質的なものへとはたらいで行かぬときの顔つき」などと変奏されながら、敗戦後の日本人のやりきれなさや苛立ち、精神の荒廃を示している。

このように、この小説は、冒頭から敗戦後の日本人の精神の荒廃状態を示しているが、あらかじめ、あらすじを確認しておくこと次のような内容である。

……一九四七、八年ごろの東京。急いでいるときに限って電車がなかなか来ない。待っている人はみんな「不服そうな不機嫌な顔」をしている。プラットホームには人がどんどん増えてくる。語り手の「おれ」は、増えてくる人を見ていて、自分は何としても電車に乗るけれども、電車に乗れない人が出てくれば良いという「さもしい気」になっている。「おれ」の知っている娘は、赤羽から有楽町まで通勤した四年間、一度も座れず病気になるまで死んでしまった。誰も娘に席を代わってあげなかった。いまの「おれ」も席を代わる気持ちになれない。プラットホームに掲げられている木札の言い回しさえ不愉快になってくる。そのような「おれ」の気持ち暗示するかのうに痰がからんで気持ち悪い。ようやく電車が来た。先頭の車両はあまり混んでないらしい。みんな日本人用の車両を目がけて我さきに電車に乗り込もうとする。「おれ」の前には背の低いおやじ、右向きには中年の女がいる。おやじは混雑する乗降客の圧力を受けて上へ飛び上がらざるを得ない。それを中年の女が笑い者にし、後ろから毒づく。「おれ」はおやじへの深い同

情を感じ、何か言って女をへこましてやりたいと思う。意を決して女を罵倒しようと思った途端、最後の客が降りてみんな車両にのめるように突っ込んでいった。誰も降り降りのなかった先頭の車両を先頭にして電車がすべりだした。痰はどうなったのか分からない。……

このように「おどる男」は、語り手「おれ」が見かけた、ある日の駅でのひとこまを丹念に描いた小説である。メインになるのは、圧力を受けておどるようになり飛び上がるおやじが笑いものにされる場面だが、それ以外にも重要な場面がある。以下、全体を四つの場面に分けてそれぞれの叙述を追ってみよう。

(1) 電車が来るまで

さきを確認した冒頭部分では、みんなが「不服そうな不機嫌な顔」で、顔色が悪く「屈辱感のようなものがつきまとう」と言われていた。感情を外に向けて発散できない、はずかしめを受けたような思いが内側にこもったようになっていく。外部に向けて発散できるのならまだいいのだが、そうはならず「みなわるい顔いろをしている。さえぬ色だ」というのだから、鬱屈した思いを内部にためこんだ不健康な精神状態であり、晴れ晴れとした気持ち、心が生き生きとした状態からほど遠い。先走っていえば、この「屈辱感」には、主権を奪われた占領下という時代背景が含意されていると言えるであろう。電車が来ないことだけが問題なのではない。「屈辱感」とは、占領下であることが背景としてあって初めて成立する語にほかならない。さらに、続けて次の描写に注目したい。

不意に、どの男もどの男も同じ顔をしている気がしてくる。顔の広いのもあり、背の高いのもあるのが、みなそろって今ごろの日本人といった顔をしている。いらいらしている当の問題が片づいたところで、つまり電車が来たところで、すし詰めになつてどこかまで運ばれるだけで、そこで足す用事もろくでもないことだ。その用事のつぎの用事もそうだ。家へかえつてもそうだろう。朝からもそうだった。それにしてもはやく来ねえか、といった顔をしている。たばこでも吸おうか。しかし来るとつまらぬな。消しても下手をするをばさばさになる……そういう、心が快活に、外へ外へと、本質的なものへ本質的なもの

のへとはたらいで行かぬときの顔つきでみなそろっている。おれも同じ顔をしている。(『中野重治全集』第三巻、四二―四三頁)

「いらいらしている当の問題が片づいたところで、つまり電車が来たところで、すし詰めになつてどこかまで運ばれるだけで、そこで足す用事もろくでもないことだ」という記述からは、電車が来ないことが根本の原因ではない、それよりも根深い問題があることが分かる。つまり、出口なしのやりきれない状況である。ここにも主権を奪われた占領下であることが含意されているだろうが、ほかにも出口なしの状況は、人々の生活のさまざまな場面に現れていた。たとえば、敗戦直後の生活は、戦時下よりも食糧不足で困窮をきわめたと言われているが、配給による食糧事情がかなり悪かったために闇市がにぎわった。しかし、闇をやらずに餓死した人もいた。旧制高校教授の独文学者亀尾英四郎(エッケルマン)『ゲートとの対話』岩波文庫などの訳者)や東京地方裁判所の山口良忠判事が知られている。また、多くの男性たちは、除隊になり復員してきてもすぐに仕事があつたわけではなかった。戦争で夫を亡くし「戦争未亡人」と呼ばれた女性たちは、恩給を停止されてもつと苦しい生活を強いられた。このような窮乏生活の一方、戦時の制約がとけて多種多様な雑誌が出たり大衆文化が盛んになったりもした。^(注)敗戦後の状況は一面的にはとらえられないが、本文では、他人のことなどかまっていられないといった、荒んだ精神状況が語られている。電車が来たつて、すし詰め運ばれるだけで「そこで足す用事もろくでもないことだ。その用事のつぎの用事もそうだ。家へかえつてもそうだろう。朝からもそうだった」という部分からは、希望を見出すことのできない、捨てばちで投げやりな、やりきれない精神状況であったことが読み取れる。

語り手自身についても「おれのほうは、人がふえてくるのがつまらなく、気に入らない」とあって、自分だけは乗りたいが、乗れない客がいれば、それだけ車両に余裕ができるだろうという、自分の損得だけを考えているさもししい気持ちになつていことが分かる。そして、四年の通勤のあいだ、一度も座れず病気になるまで死んだ知り合いの「不幸な娘」について、誰も席を代わってやらなかったことを憤慨する一方、いまの「おれ」も席を代わるような気持ちになれないと自覚し

ている。この「不幸な娘」のエピソードからは、三つのことが言えるだろう。まず、弱い立場にいる者へのいたわりの気持ちを誰も持っていないことを憤慨する点である。次に、憤慨する「おれ」自身も、実は席を譲る余裕がない状態であることを自覚している点である。さらに、弱い立場の者ということでは、のちの場面で出てくる、圧力に押されて飛び上がるおやじ（彼こそが、この作品のなかで最も弱い立場に置かれた存在であった）の伏線になっているという点である。「不幸な娘」は単なるエピソードではなく、のちの展開に欠くことのできないものであった。

さらに、語り手は、電車が来ないことに加えて、プラットホームの木札の文句に対しても不快に思っている。ホームの木札には、英語で「NO LOITERING」とあり、日本文を見ると「無用の者歩廊を徘徊すべからず」とある。いくつか別のところでは「固ク車外乗車ヲ禁ズ」とあったことを思い出し、「おれ」は「なんだつてこうだろう」とまた不服になっている。語り手が不服に感じているのは、なぜこんな言葉遣いをしているのかということだろう。「無用の者歩廊を徘徊すべからず」は、漢文訓読調で威厳や格調の高さをねらっているのか、「むやみに歩き回るな」などもっと分かりやすい率直な言い方をすればいいのにと「おれ」は感じているようだ。「固ク車外乗車ヲ禁ズ」にしても、「外からぶらさがるな」という意味の英語のほうが分かりやすいと考えている。「車外乗車」という言い方は、漢語にわざわざしているが、車の外で車に乗る、というのは矛盾していて分かりにくい。ラウドスピーカーでがががアナウンスされる「降り降りはおはやく願います…」にしても、普通の日本語としては「降り降り」なのに、降りる人が先だからという理由だけで「降り降り」にしたのだろう。形式にこだわる官僚的な言い回しが、やはり「おれ」には不快なのだ。木札の文句とラウドスピーカーのアナウンスへの不服からは、「おれ」の言葉に対する感覚を読み取ることができると。「おれ」は、分かりにくい言い回し、官僚的で形式にとらわれるような言い回しではなく、率直で分かりやすい実質的な言い方を好んでいる。

そうこうしているうちに「咽喉の下がいやな気になってきた」。痰が咽喉にかわまってきて、不快な気持ちになってきたのだ。痰壺は、戦争で供出されたまま戻ってきていないため、吐き出すこともできなくて、不快感を抱いたままである。なかなか電車が来ないこと、「おれ」も含めて自分さえよければいいという殺伐と

した利己的な人間ばかりだということ、木札の文句が分かりにくい言い回しだということ、それらすべての不快感が咽喉にからむ痰の不快感によって増幅される。吐き出そうにも吐き出せない痰は、「おれ」が不快感から逃れられないことを暗示している。なお、一九四一年秋ごろから金属回収令によって供出させられていたのは、痰壺だけでなく多岐にわたった。供出したのは企業だけでなく、バケツ、火鉢、菓子器、装飾品など家庭の金属製品も回収の対象になった。この作品内の時間が敗戦直後であることは、このようなまだ戻ってきていないという痰壺の点描にもうかがえるであろう。

(2) 電車が来たとき

さて、ようやく電車が来たときの先頭車両に対する人々の反応は、次のように描かれている。

車がはいってきた。ふうつと捲いてくる。思いあきらめたような表情、底の浅い受難といった表情で順に顔がねじられる。目だけが車を追う。ねじれた視界のはずれを白い線がすうつと滑って行く。

みんなの目がそこへそそがれる。この目がこの二年ほどかわってきた。四五年ごろの目とはだいぶ違っている。一枚ばりのガラス、ガラスごしの光線、クシヨンとその色、車室内のぼらつとした人の居具合、その全体にたいして、嫉ましいとか羨ましいとかいう目をするものが誰もいない。認識しはするが、それ以上心をうごかしている余裕がない。日本人の箱へ！……目測がはずれただけ急いで第二箱へおしかけてくる。第二箱のおれのところへ圧力がかかつて客がたまってきた。(『中野重治全集』第三巻、四五頁)

我先に乗り込もうと思つて身構えたあと、先頭のがらんとした車両を見る場面である。白い線の引かれた先頭の車両は占領軍(当時は進駐軍)専用の車両だった。GHQは、占領軍の輸送を優先し、戦後も焼けずに残っていた、状態のよい寝台車、展望車、食堂車などの車両を中心に、五百両(九百両の説もある)の客車を接収し、占領軍専用車とした。貨車も一説によれば一万両近く接収されたという。日

本各地に配属された占領軍部隊を輸送するための専用列車の運行が優先された。なかには、現在でいうサロンカーのような豪華な車両もあったらしい。車両の側面には「ALLED FORCES」「US・ARMY」などの文字が書かれ、白線がひかれていたことで「白帯車」と呼ばれていた。各地に配属するための単独の列車だけでなく、山手線や京浜線などの国電にも連結されていた^(注)という。

作品で描かれているのは、この国電のことである。国電は国鉄電車の略称で、現在、国鉄（日本国有鉄道）は一九八七年に民営化されてJRとなつていて。作中の描写からは、占領軍用の車両は小さいので人もそれほど乗ってはいないようだ。日本人用車両との待遇の差は歴然としている。その優遇されている先頭車両に対して羨望のまなざしを向ける者が誰もいない、というのは、後続の「認識」はするが、それ以上心をうごかしている余裕がない」という文からもうかがえるように、自分が日本人用車両に乗れるかどうか、そのことに夢中でほかのことに関わっている余裕がないからである。

しかし、ここには明らかに占領軍専用先頭車両に対する違和感が埋め込まれている。作中の描写では、自分が電車に乗れるかどうか、目先のことだけに一杯で、優遇されている占領軍専用車両へのあからさまな批判は見られない。だいたい、そのような批判を書き込むこと自体、当時の検閲制度においては不可能なことであつたに違いない。だが、ここでの描写はその危険性をおかしてでも、いかに白帯車両が日本人車両と異なっているか、ということがきちんと書き込まれている。このことに留意すべきであろう。ジョン・タワーは、前掲『敗北を抱きしめて』において、日本政府が占領軍維持のために莫大な予算を計上しなければならなかったことを述べているが、たとえば、一九四八年の段階でおよそ三七〇万世帯の日本人が住宅のない状態であつた一方で、日本政府は占領軍の住宅には相当の予算を割り当て、アメリカの生活水準にあわせた家を用意した。アメリカ人将校が、自分のために接収された民家を「最新式」にしてほしいと望めば、電気や水道の施設を取り替えて、電話やトイレなど新しい設備を設置したという。そして、次のように続けている。

一九四五年二月、母親に背負われた幼児が窒息死して、国鉄の耐えがたい

混雑ぶりを象徴していたとき、日本政府は占領軍要員のために特別列車を出し、たいていゆったり座れる「占領軍専用列車」さえ無料で提供しなければならなかった。「占領費」に多少とも関心を払うアメリカ人はほとんどいなかったが、多くの日本人にとって占領の代価は容易に目に見えるものであつた（『敗北を抱きしめて』上巻、一三五頁）

いかに占領軍が優遇されていたか。「おどる男」が描く白帯車両はまさにその光景であり、さらに、その先頭車両は、すし詰めの日本人車両を先導する車両でもあつた。すなわち、当時、占領軍に指導される日本のメタファーとしてこの日本人車両をとらえることができるのである。

(3) 電車が来てからー飛び上がる「おやじ」と毒づく「中年の女」

乗降客で混み合うなか、「おれ」の目の前には鳥打ち帽をかぶった背の低いおやじがいる。このおやじは「おれ」よりも、また「おれ」のとなりの中年の女よりも背が低い。だから、大勢の乗降客の圧力を一身に受けて、やむなく上に飛び上がらざるを得ない。かぶっている帽子が鳥打帽ということから、おそらくこのおやじは、大会社に勤務しているようなエリート会社員とか学校の教師とかではないだろう。当時の会社員や教師なら、帽子をかぶるとすれば鳥打帽でなくソフト帽ではないだろうか。職人あるいは労働者であることが想像されるが、それは「おやじ」という呼称からもうかがえる。

おやじは、乗降客の圧力におされて、やむを得ず飛び上がるようになった。目の下で飛び上がられるので「おれ」は迷惑だし、女もそうらしい。飛び上がるといっても「一寸かそこいら」で大したことはないけれども、女の鼻のあたりに鳥打ち帽がつかかるようだ。

「なんておかしな人でしょう。」

そのとき女が、前向きそのまま口を切つた、「おどつたりなんかして……」

「おどつたりなんかして」—— まつたく、そうでないことはない！ おや

じはとどめを刺されて、そのうえ滑稽なものとして刺されたのだつた。

「あら、またおどる！」

おやじの首がちよつと動いた。何か言おうとしたらしい。しかし声は聞こえなかった。それどころではない。まだまだ彼は飛びあがりつづけねばならぬ……

「あら、またおどる！」

うしろでくすつとというのが聞えた。おれは女が憎くなつてきた。横目を見ると厚みのある顔をしている。それだけに憎ていに見える。

「しようがないじゃないか。」という言葉がおれの口から出そうになつた。「しようがないじゃないか。彼は位置で不幸なのだ。彼は上へ、空中へ逃げてるのだ。さもなければ潰つぶされてしまうのだ。そう『なる』じゃないか……」

うしろを向けぬ男に、うしろから、背なかにくつついていて毒づく女！それが、おやじにたいする溺れるような同情をそそつてきた。まだ下の方で、亀の子細工みたいな恰好でおどっているおやじ、こいつのため、何かひとこと女にいつてやらねばならぬ。(『中野重治全集』第三巻、四七頁)

中年の女は、その言葉遣い「なんておかしな人でしょう」「おどつたりなんかして」「あら、またおどる！」「ほんとに、どうしたつてんでしよう、この人！」などからしても、山の手中産階級の女性のような。男女の言葉遣いの差はあるけれども、電車を待つ人たちの言葉遣い「来ねえな」「それにしてもはやく来ねえか」といった言葉遣いとは違っている。女がおやじに「邪険な声」で「下男をでも突き飛ばすような剣幕」で非難するのは、語り手の「おれ」がそのように受け取っているわけだが、相手が背の低い鳥打帽のおやじでなく、ソフト帽を被った会社員や教師であれば女の反応も「下男をでも突き飛ばすような剣幕」にはならなかったかもしれない。中野重治の初期の短篇小説に「交番前」(『プロレタリア芸術』一九二七年十一月号)という作品があるが、これは、印半纏を着た老いた道路工夫が仕事帰りに微醺を帯びていたため巡査に足留めをくらつて、結局警察に連行されるという話である。「おどる男」の女とおやじの構図は、「交番前」の巡査と道路工夫の構図に似たところがあり、極端な言い方をすればともに労働者を見下している構図と言えるだろう。

「おやじはとどめを刺されて、そのうえ滑稽なものとして刺されたのだつた」とあるが、圧力を受けるおやじの苦肉の策としての振る舞いに對して「おどつたりなんかして」という女の言葉は、おやじの窮状を全く理解していない。おやじに打撃を与え、そのうえ、おやじを笑ひ者にするのである。周りの人は、女の言葉に反応して「くすつと」笑う。女の言葉は、確かに効果があつたのだ。女のおやじへのひどい侮辱である。

一方「おれ」も女と同様に、目の前で飛び上がるおやじから迷惑を受けているのだが、女のような態度はとらない。また、周りの客のように女の言葉に従つておやじを笑つたりもしない。おやじを気の毒に思い、女を憎く思うようになる。ここには「おれ」の人間性や倫理観が表れている。「おれ」は、弱い者を馬鹿にする、笑ひ者にするような人間を許せないのだ。人を憎むこと、憎むという負の感情を示すのは、つつしみのないことと普通は思われているだろう。しかし、普通一般のことと違い、場合によってはその対象を憎むことは十分あり得る。「おれ」には女の振る舞いが許せないのである。「うしろを向けぬ男に、うしろから、背なかにくつついて毒づく女！」というところから、「おれ」には女の振る舞いが卑怯で悪らつなものに思えたからだ。電車の混み具合に疲労し、善悪などどうでもいい、自分さえよければいい、というような精神状況のなか、「おれ」はそのような荒んだ気持ちを自分も持っていると感じていた。しかし、おやじと女との「事件」を目撃して、おやじに同情し女を許せないと考える。それは、「おれ」がそのような荒んだ状況に抗いたい、そのような状況から脱していかねばならぬ、と思つていることによつていられるだろう。このことは、明瞭に語られているわけではない。しかし、「おれ」の心情を分析すると、「おれ」の無意識の抗いを指摘することができる。

なによりも「おれ」は、おやじについて「彼は位置で不幸なのだ」と考えていた。おやじの位置は、ちょうど降りる客と乗る客とはさまの、扇の要のような位置である。それは、最も圧力を受けるところ、一番弱い位置になる。この位置は、戦争に負け、外国の占領を受けていた、当時の日本の置かれた位置にも通じている。おやじにしてみれば、女に反論したいと思つても、その位置からは決して反論できない。自分の意見は封じられているのである。

さらに「おやじにたいする溺れるような同情をそそつてきた」とあるように、「おれ」には、いかんともしがたく、おやじへの同情の気持ちがあわいてくる。「同情」は、相手の苦しみや不幸を相手の身になってともに感じることである。「おれ」はおやじの側に身を置いて、「こいつのため、何かひとこと女にいつてやらねばならぬ」と考える。ここにも「おれ」の人間性や倫理観の表れを見ることができらるだろう。女への憎しみ、おやじへの同情、それらは「おれ」の倫理観から出てきた表裏一体のものである。弱い者と同じ側に立つて助けたい、弱い者を圧迫する者に対して成敗してやりたいと思う「おれ」の心情を示しているのである。

(4) 罵倒する直前

最後の場面は、次のようである。

「ほんとに、どうしたつてんでしよう、この人！」

それは邪険な声だった。女は、下男をでも突き飛ばすような剣幕で、高い声を出した。「ばばあめ！」と思つたときおやじが振りむきそうにして、しかしそのままのめるように前へ突つこんで行つた。最後の客が降りたのだった。つづいてのめるようにおれが突つこんだ。ばばあが続くのが見えた。そしてそのままぐいぐい押してうしろから見えなくなつた。棒につかまつたおれの両脇をぐいぐい押してきて、おれを押しながらからだをひとまわりして押されて行くおかしな腹の立つのがあつた。そして「うむ……」というほどいつぱいにつまつた。笛の鳴るのが聞えて、このあいだじゆう一人も降り降りのなかつた先頭の箱を先頭に電車がすべり出した。痰はどうなつたのかわからない。(『中野重治全集』第三巻、四七〜四八頁)

「おれ」には、女がおやじを「下男」のように見下していると思われた。「おれ」の怒りは頂点に達して、女を罵倒しようと思う。「ばばあめ！」というこの罵倒の言葉は、確かにひどい言葉である。しかし、それだけ「おれ」の怒りが強かつたということでもある。地の文でも「女」ではなく「ばばあ」という呼称に変わっている。「下男」のようにおやじを扱う女の言い方に「おれ」は我慢できなかつた。

た。だが、この罵倒の言葉はついに発せられることはなかつた。最後の客が降りて、みんなが車両になだれ込んでいったためである。「おれ」が女を罵倒すれば、悪らつなやり方でおやじを侮辱した女をやりこめることができただけだが、そうすると悪を懲らしめて最後には正義が勝つという勸善懲惡の類話になつてしまう。この小説は、そのような平板な類型的結末にはなつていない。「おれ」の思いは宙に浮いたまま、混みあつた車両に押し込まれていく。すなわち「おれ」が抗おうと思つていた荒んだ状況は、打破できないままに終るとのことだ。結局、最後にはやはり混雑した車両が前景化されるのだった。

そして、先頭車両は「このあいだじゆう一人も降り降りのなかつた先頭の箱を先頭に電車がすべり出した」と言われている。先頭車両は空いていて、日本人用の車両とは全く異なる別世界のようなのである。その対比から、日本人用の車両のすさまじい混雑がさらに浮き彫りになつていく。最終部で先頭車両のことが再び出てくるのは、そのような効果があるが、先頭車両は優遇されているだけでなく、この先頭車両に日本人用車両が引っぱられていくのである。ここに、占領下の日本の暗喩を読み取ることができるとは言うまでもない。

最後の一文で「おれ」の不快感を暗示していた痰はどうなつたのか、どさくさにまぎれて分からなくなつてしまつた。このことは、「おれ」の不快感のもとになつている問題がきちんと解決されたということの意味しているのではない。いつのまにか分からなくなつてしまつたということ、問題は何も解決されていないということだ。占領軍に先導（指導）される状況、やりきれなさや苛立ち、精神の荒廢した出口なしの状況は、このあとと続くのである。

三 「軍楽」

以上のように「おどる男」を読んできたが、この小説は「軍楽」と読み比べることで深さを増す。すでに確認したように、一九四八年十一月七日に執筆された「おどる男」とほぼ同時期、わずか十日違いで書かれた「軍楽」（十一月十六日執筆）は、復員してきたある男が敗戦後の日比谷公園で外国軍の楽隊が演奏する慰霊祭の音楽を聴く小説である。男は音楽を聴きながら「殺しあつたもの、殺されあつたものたち、ゆるせよ。殺され合うものを持たねばならなかつた生き残つた

ものたち、ゆるせよ……」と思う。悲惨であった戦争を思い出しながら、敵味方かわりなく多くの死者たちに思いを寄せるのである。その意味で、この小説は何よりも反戦平和を意図した作品と読めるであろう。だが、それだけではなく、「軍楽」には複雑なテーマが織り込まれている。小説はこんなふうには始まっている。

一九四五年九月末のある日、ひとりの兵隊服を着た男が渋谷から日比谷の方へ歩いてきた。この男は、一週間前に復員してきていた。日本が降伏する二カ月前に召集され、ある山村へ行き、そこで八月十五日を迎えたあと、東京へ戻ってきたのである。そして男は、次のような人物として描かれていた。

男は社会主義者だったから、戦争になつたあくる日検査されて、それからずっと通いでしらべられていた。わたしは社会主義者である。わたしはこの戦争を帝国主義侵略戦争として認めてこれに反対する。わたしは日本に社会主義革命を成功させねばならぬと考えている。いままでのわたしのすべての言動はそこに集中していた。そのことをわたしは改めてしかと認める。そう警察は男に言わせようとした。それは社会主義者として認めていいことであつた。しかしそれを、労働人民にはかくして、警察にだけ認めることはよくなかつた。ひと月、ふた月、三月、半年、一年、二年、三年と続くうち、男には、相手の言いなりに認めようかと思う瞬間があつた。いまに戦争が終るだろう、日本が負けて終るだろう、そのときまで引つばらねばならぬという考えが男を思いきりわるくささえてきた。召集令状が来た日まで男は警察へ通いつづけた。(『中野重治全集』第三巻、五一頁)

男は「社会主義者」と言われていて「共産主義者」とは書かれていない。おそらく、第一節で見たような占領政策が転換された情勢であつた一九四八年十一月段階で「共産主義者」という言葉を使用することに中野はためらいがあつたのである。いずれにしても、戦争中、警察に通わせられて転向を約束する手記を執筆させられていた中野自身の経験が下敷きとなっている記述である。「おどる男」では語り手「おれ」であつたのが、「軍楽」では「男」となっているものの、中野自身が「男」のモデルであることは間違いない。

汗をふきながら歩く男は、日比谷が近くなつたことに気づいて警視庁と裁判所を見てやろうと思う。「あいつら、まだいるのだろうか。菌のあいだへ火箸を打ちこんだり、無垢な娘の陰毛を焼いたりしたあいつら、まだいるのだろうか。まだいるのだろうか」と、「爬虫類のような警視庁」のことを考え、自分が捕えられていたときのことを思い出す。敗戦直後の日比谷は、すべてが「乞食のようにつぶれて、うすぎたなく無気力に横たわつて」いるように男には見えた。「見かける人という人が衰弱して見えた」という。「乞食のようにつぶれて、うすぎたなく無気力」であるのは、男もそうである。「おどる男」で見たような精神の荒廃と同じような状況にあることがこの作品でもうかがえるが、「おどる男」になつた観点は、拷問をおこなっていた警視庁をはじめとして、戦前の資本家階級や天皇などの支配層を敵とみている点である。それは、このように書かれている。

ながく孤立してさいなまれてきたため、男の精神は一人前らしくないものになびていた。仕事を国民の手にわたすまいとして、春以来秘密に事を運んできた大資本家階級の目論見はこの男にも利いていた。戦争の終結は、国民にたいする最大の不意打ちとして絶対の上から打ちおろされねばならなかつた。ころあいを見はからつていた大資本家階級が「よし！」と命令した。天皇が幕を切つておとした。新しい内閣がすべてのものをかくしこみ、腰くだけですわりこんだ人びとを追いたてて証拠書類を焼かせた。山のなかの村で、男の部隊も二日間書類を焼いた。そこから何かを取りだしてくるため「よし！」といつて立つて行く気には男はなれなかつた。よろこびが来たときに戸惑いが来たのでもあつた。(『中野重治全集』第三巻、五二頁)

「ながく孤立してさいなまれていた」というのは、戦争中、かつての運動仲間とは離れてしまい、男がひとりで警察に通い続けていたことを指している。戦争の終結は、男に喜びをもたらしたものの、同時に戸惑いも感じたときとされているが、男は、戦争の終結を手放しの歓喜のうちに迎えたわけではなく、萎縮した精神を抱えて戸惑いながら、戦後という時代を歩き始めたのだった。この作品が歩いている男の姿から始まっているのは、新しい時代を歩き始めたという比喩表現でも

あるのに違いない。しかしそれは、決して潑刺としたものではなく「乞食のようにつぶれて、うすぎたなく無気力」な情景のなかを歩いてきたということだ。いったい、その責任はどこにあるかというところ、大資本家階級と天皇にあり、彼らは証書類を焼かせて戦争は終結した。このように戦前における日本の支配層を批判しながら、その一方で、道の途中で見かけた外国兵のことは、次のように描かれていることに留意したい。

しかし男は、外国兵たちの正式の軍服が平和的に、自分の星を取った帽子、肩章をむしり取ったかばかばの夏衣袴が軍国主義的に見えるという意識から逃れられなかった。戦闘帽、その下の坊主刈り頭、汗にまみれた汚い黒い顔、やせたからだ、洗濯で筋になつて剥げた上着、ズボン、膝下のつままり具合、そういうすべてがすべての弁解を越えていた。それはつまらなかつた。それは野蠻であつた。

「君ら何でじつとしていたんだ。おれたちあすこまで来てたじやないか。」
そういわれたら一言もないという感じが男のなかに出ていた。服装の清潔さと美しさがそう言っているようにみえた。

「そんなこと言つたつて仕方がなかつたじやないか……」といつて苦笑することが、国内的には通つても国際的には通らぬひろい間に合わなさが男によくわかつた。(『中野重治全集』第三卷、五六頁)

男は、他に着る服がないのだから、いまでも兵隊服の姿でいる。そして、外国兵の軍服と、日本の兵隊服とをくらべてみると、外国兵の軍服が平和的で、自分の兵隊服が軍国主義的に見えると考えている。すなわち、外国(ここでは米軍を代表とする連合国軍)が平和を、日本が軍国主義をあらわしているという位置づけになっている。外国兵から「君ら何でじつとしていたんだ。おれたちあすこまで来てたじやないか。」と言われるのではないかとびくびくしているのは、日本人が自分たちの力で軍国主義を打ち倒すべきであつたのに、じつとしていただけで何もしなかつた、ということを非難されているように錯覚しているのであろう。自分の格好が野蠻なものにしか思えない男には、「そんなこと言つたつて仕方がな

かつたじやないか……」という弁解が、日本国内では通用しても国際的には通用しない言いわけにすぎないことが分かつている。ここからは、一九三二年の満州国建国をめぐる問題により、翌年、日本が国際連盟を脱退して国際社会から孤立していった経緯が想起される。日本の正当性は自国内部だけで通用するもので、国際的にみれば通用するはずもなかつた。自国の内側の論理だけで成り立っていた戦時日本を克服して国際社会へ復帰するためには、日本の兵隊服が象徴する軍国主義をなくし平和への道を進むことによってしかあり得ない。ここには、当時、大東亜戦争と呼ばれたアジア太平洋戦争が「帝国主義侵略戦争」であつたという男の認識が明瞭に映し出されている。

さて、市政会館(日比谷公会堂)のところへ出た男は、その広場で外国兵の音楽隊が演奏しているのを見た。人垣のなかにアメリカ兵がまじつていて、上官に対して報告者が敬礼をして何か報告するのが見えた。男は、その敬礼や報告の仕方を見て「非常な違いを発見した」と考える。

それは敬礼の仕方にあらわれていた。報告の仕方にあらわれていた。歩き方にあらわれていた。報告者は、「ものをいう」声で、いわば話していた。男には、距離もあつたが一語もわからなかつた。

「えへッ！　なんだその声。大きく、もつと大きく、もつと大きくだッ……」
短い兵隊のあいだ、年とつた新兵たちがはたきこむようにどなられて、大ごえを出そうとして用向きを胸忘れするというようなことはここにはないらしくみえた。二等兵が折箱のように手をあげ、それをしろつと見た軍曹が指をばらばらにした手をあげ、それをさげ、それから二等兵が、ズボンの縫目へばたつと音を立てて手をおろすというようなこともここにはないらしくみえた。彼らの歩き方は、靴底がちがうのでもあろう、音を立ててなかつた。地面を踏みつけるといふより、からだを進めることがここでの目的であるようにみえた。ひとりのときも隊のときも、人間がすすつと動いてどたりどたりしなかつた。男は目をなさずに汗をふいて見つけた。(『中野重治全集』第三卷、五八頁)

男は、自分が兵隊であつたときのことを思い出して、目の前のアメリカ兵の振

る舞い方と比べて考えている。すなわち、アメリカ兵のやり方がごく自然なもので、日本軍のように上官がむやみに威張って下級兵を叱りとばすようなことがないのに驚いている。「非常な違いを発見した」という男の思いは、服装にとどまらず、振る舞いにおける日本軍隊の野蛮な軍国主義とはまるで異なるアメリカ兵の自然さを意味しているのだ。この作品の主要テーマは、この場面のあと、新しい音楽がおこったときの男の感動、すなわち「ふるえあがるような、痛いようなものを感じた」「人のたましいを水のようなもので浄めて、諸国家・諸民族にかかわりなく、何ひとつ容赦せず、しかし非常にいたわりぶかく整理するような性質のものに見えた」「殺しあつたもの、殺されあつたものたち、ゆるせよ……」という部分に表れている。戦争は勝った方も負けた方も多大な犠牲を残した。しかし、勝つても負けてもその勝敗に関係なく、戦争で死なねばならなかった多くの人たちへの鎮魂が「軍楽」のテーマなのである。

しかし、この小説が示すのは、それだけではなく、慰霊祭の音楽によって、男が戦争の悲惨さやむごさを痛感しているのと同時に、戦前戦中における日本の軍国主義、警察の残虐な暴力、支配層の狡猾な目論見などへの批判を、外国兵との比較において描きだしている点が重要である。慰霊祭の音楽が魂を浄める場面上に、これらのことは見逃せない。これは、いわば戦争責任をどのように捉えるかという問題であり、進駐軍をどのように位置づけるかという問題である。日本共産党の「人民に訴う」は、敗戦直後の十月十日付けで「赤旗」第一号（十月二十日発行）に発表されたが、そこには「ファシズムおよび軍国主義からの、世界解放のための連合軍隊の日本進駐によって、日本における民主主義革命の端緒がひらかれたことにたいして、われわれは深甚の感謝の意を表する」と言われていた。解放をもたらしてくれた進駐軍は「解放軍」と位置づけられ、その解放軍への感謝の表明は、日本共産党だけでなく、袖井林二郎『拜啓 マッカーサー元帥様 占領下の日本人の手紙』に見られたように、マッカーサーやGHQに親しみを込めて、五〇万通にものぼる手紙を書いた日本人全体のものであった。当時の日本人の多くは、進駐軍を平和の使者として心から歓迎して受け入れたのであった。^(注3)

以上のように「軍楽」は、ほとんど同時期に書かれた「おどる男」とは、まるで異なる正反対のテーマを見せている。軍国主義ファシズムを痛烈に批判し、平和を体現する占領軍（進駐軍）観がここにはある。戦前の支配層への憎悪を織り込みながら、その対極にある外国兵が平和と民主主義をもたらした存在として描かれている。他方、「おどる男」では、占領軍に対する批判的視点が埋め込まれ、一般の日本人にはあり得ない占領軍の特別優遇措置によって日本人のみじめな状態が浮き彫りになることを描いていた。このことは、占領という事態に対する中野重治の複眼的な見方を示すものにはかならない。占領は屈辱的な事態である。しかし、それ以前の軍国主義は、もつと受け入れがたい、野蛮で非人間的な事態であった。その両面をこれらの小説は克明に描いているのである。

おわりに

「おどる男」に描かれたのは、敗戦日本の疲弊し荒廃した様子であった。日本の荒廃は、破壊された建物や不足する物資や社会の無秩序だけでなく、日本人の精神そのものが荒廃していたということである。いらいらして晴れやかな気持ちになれず損得だけを考えて自分を守ろうとするけちな根性の蔓延を、この小説の冒頭は、電車を待つ人々の様子や語り手自身の内面を語ることで描いている。

自分だけを守ろうとして、弱い立場にいる者をいたわることができないことは、「不幸な娘」のエピソードに表れていたし、そのエピソードが下敷きとなって、タイトル「おどる男」の由来でもある、のちのおやじの話が導かれていた。小説の山場は、この鳥打帽のおやじと中年の女と語り手との場面であったが、ある位置を強いられることで悲劇（喜劇のようにも見えるもの悲しさ）を体現せざるを得ないおやじの位置は、占領されていた当時の日本の位置と見ることもできる。その弱い立場のおやじを笑いにする中年の女が「邪険な声」で「下男をでも突き飛ばすような剣幕」で非難したとき、「おれ」は女を罵倒してやりたいと思う。女をやりこめることはついにできなかつたけれども、「おれ」が女に腹を立てて成敗してやりたいと思ったことは、当時の日本人全体の精神状況に抗う気持ち——すなわち、ことの善悪などどうでもいい、自分さえよければいいというような荒んだ精神状況から脱していききたい、脱していかねばならないという願いを

意味していたと考えられる。「おれ」の人間性は、間違ったものや卑怯なものを憎み、正しい方向へ向かわせたいという倫理観に基づいていた。そしてそれは「おれ」がきちんとものごとを観察することができ、的確な判断を下すことができることによっている。

しかし、結局「おれ」は罵倒できなかつた。未発の罵倒語は宙に浮いてしまうのである。罵倒して女を成敗すれば、悪を懲らしめて正義が最後に勝つという類型的な話になりかねない。だが、この小説は、そのような凡庸な類型を免れて、個人の倫理観ではどうにもならないようなもつと大きな力の存在を示すドラマなのである。それは、結局、作品の冒頭、振り出しに戻る出口なしのような敗戦後の日本の状況であり、当時の日本が置かれた位置によるものであつた。さきに触れた、不幸な位置に置かれたおやじが思わせる日本の位置は、先頭の車両に先導されていくすし詰めの日本人の車両によつても暗示されている。優遇されている占領軍車両と混雑を極める日本人車両との対比は、日本人が弱い立場に置かれ、占領軍によつて先導（指導）されるという状況を示しているようだ。

一方「おどる男」とほぼ同時期に書かれた小説「軍楽」では、アメリカ兵に対しての好意的な見方が描かれていた。彼らの普通で人間的な振る舞い方が、日本の野蛮な軍国主義のやり方とはまるで違っていることに主人公の男は驚くのである。男は日本の軍国主義は嫌だつたとつくづく思う。慰霊祭の音楽を聞きながら、戦争は本当に人々を苦しめたと心から思う。「軍楽」では、戦時下の日本の軍国主義からの解放をもたらした外国（アメリカ）との対比によつて、日本の軍国主義を批判し、民主的なアメリカを好ましく思うという構図になっている。他方「おどる男」では、占領軍専用車両と日本人用車両との対比によつて、苦難を強いられる日本人を描きだすことで、占領軍への批判を埋め込んでいることが理解できた。批判の対象としてのアメリカと、羨望の対象としてのアメリカと、それぞれが描かれているということだ。時代背景を見るさいには二面的な見方では不十分であり、「おどる男」と「軍楽」とを読み比べることで、戦時下の支配層と被支配層との関係、戦後日本の置かれた立場、戦後の日米関係などが浮びあがってくるだろう。

そのことは、たとえば『吉田茂ニマツカーサー往復書簡集』^(注4)において序文を寄

せたジョー・B・ムーアのこのような言葉にも端的に表れている。

日本占領は七年足らずで終わった。しかし占領のもたらした民主改革の効果については、この半世紀はげしい議論が続いている。一方の側には、明治以来の日本の社会運動の中で追求されてきた権利、つまり自分の生を形づくる決定に参加したいという、ふつうの日本人の望みを、占領による民主改革が実現したのだと見る人々がいる。他方には、日本の民主化なるものは、この国古来の文化的伝統と国家の主体性を占領軍の強圧によつて破壊し、外来の「西欧」的価値を強要したものだと言張る人々がいる。

このような占領政策に対する肯定と否定とは、一九九〇年代以降、いっそうの分断を見せて現在の日米関係や歴史認識に大きな影を落としている。敗戦後、およそ六年八カ月にわたつて占領政策が推進され、非軍事化と民主化を軸とした戦後改革がすすめられた。戦後改革は、なによりも戦後民主主義を進展させ平和と経済発展を日本にもたらしたのである。しかし、それは占領軍の支配のもとで^(注5)のことであり、言つてみれば米国に従属するかたちであつて、日本は独立した一国というわけではなかつた。講和条約発効後、日本はようやく占領を脱する。だが、沖縄や北方領土は取り残された存在であり、いままも変わらず取り残され続けている。一九七二年の施政権返還まで沖縄はアメリカの支配下にあり、現在も講和条約と同時に締結された日米安保条約によつて、沖縄には広い範囲にわたつて米軍基地がある。米国従属の構造は変わらない。他方、ロシアの占領支配を受けている北方領土についても同様のことがいえるであろう。^(注6)

本稿で取り上げたふたつの短篇小説に見られた占領軍への両義的見解は、中野の占領に対する複眼的な見方を示し、さらにはアジア太平洋戦争をどのように位置づけていたかがうかがえるものであつた。アジア太平洋戦争と占領とをどのように位置づけるか、現在でもその問題は政治的立場によつて大きく異なる。一九四八年という重要な年に書かれた中野重治のふたつの短篇小説は、それを考えるさいに有効な視点を供与してくれている。

注

- (1) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』上下巻(岩波書店、二〇〇一年、増補版は二〇〇四年)
- (2) 所澤秀樹『国鉄の戦後がわかる本』上巻(山海堂、二〇〇〇年)参照。
- (3) 袖井林二郎『拝啓 マッカーサー元帥様』(岩波現代文庫、二〇〇二年、原著は大月書店、一九八五年刊)による。同書において引用されているさまざまな手紙の文例にもあきらかなように、五〇万通の手紙のほとんどは、占領に好意的であり、新しい支配者であるマッカーサーに対して支持と賞讃の念を披露していた。拙著『戦後日本、中野重治という良心』(平凡社、二〇〇九年)においても、この点については詳述した。
- (4) 袖井林二郎編『吉田茂とマッカーサー往復書簡集』(講談社学術文庫、二〇一二年、原著は法政大学出版社、二〇〇〇年)
- (5) 白井聡『永続敗戦論』(太田出版、二〇一三年)では、戦後日本の対米従属の構造について「永続敗戦」という概念を用いて次のように論じている。「敗戦の帰結としての政治・経済・軍事的な意味での直接的な対米従属構造が永続化される一方で、敗戦そのものを認識において巧みに隠蔽する(＝それを否認する)という日本人の大部分の歴史認識・歴史的意識の構造が変化していない、という意味で敗戦は二重化された構造をなしつつ継続している。無論、この二側面は補完する関係にある。敗戦を否認しているがゆえに、実際のない対米従属を続けなければならない、深い対米従属を続けている限り、敗戦を否認し続けることができる。著者は、このような状況を「永続敗戦」と呼んで、戦後日本の特質を言い当てているのである。すなわち、「永続敗戦」とは、「戦後民主主義」を否定的に扱い、「戦前の価値観への共感を隠さない政治勢力」が、国内およびアジアに対しては敗戦を否認し、他方、米国に対しては敗北すなわち「卑屈な臣従」を続ける構造のことで、「敗戦を否認するがゆえに敗北が無期限に続く」構造であるという。
- (6) 竹前栄治『占領戦後史』(岩波現代文庫、二〇〇二年、原著は双柿社、一九八〇年刊)などによる。

付記

二〇一三年九月一日から一月二四日まで、石川近代文学館で開催された展覧会「中野重治 内筆原稿に見る〈文学者〉として生きた生涯」では「おどる男」の草稿が展示されていた。それによると「おどる男」の元のタイトルは「実用的な話 おどり」であったことが判明した。どのような意図でつけられたタイトルなのか、また改変の意図は何であったのか、今後の検討課題としたい。